

ジョイサポコラム No.23

女子医学生の好きな言葉「キャリアプラン」

眞仁会横須賀クリニック 内田 啓子



2022年3月に都内の医科大学を早期定年退職し、同年4月より縁あって眞仁会横須賀クリニックに入職し、日々外来透析医療に従事しています。

退職前の10年間は診療・研究よりも教育に比重のある生活を送っていました。医学教育も私が学生の頃（今から40年ほど前になります）とは様変わりしました。臨床実習に出る前に全国一律に行われるCBT（知識の試験）、OSCE（臨床実技の試験）の受験が必須で、合格すると学生医という称号を得ます。全国の医学生は同じネームプレートを胸に臨床実習に参加しています。基礎医学、臨床医学の膨大な知識に加え、多種職協同教育や患者によりそう医療がかかげられ、コミュニケーション能力の強化、キャリア教育にも力をいれなければなりません。そして各大学

の医学教育はそれを認証する組織による定期的な評価を受験しなければならず、その認証がない医学部の卒業生は海外の医師国家試験の受験資格が得られないというしくみです。女性医師の割合も増え（私のいた組織の学生は皆女性でした）、我々女性の教員はキャリア教育におのずと参加することになり、自分史を学生にさらけ出すこととなります。そのため私も自分の年表のようなものを作成していました（探せばネットのどこかにあるやもしれません！）。年表にしてしまうと、なんとなく辻褄があって今があるように見えますが、私からしてみれば、いつも行き当たりばったり、えいやとばかり決断して左右前後黒白を選び、あきらめたことも多々ある中、なんとかつながった、薄氷をふむような日々だった、年表にはたまたまうまくいったことだけが並んでいるだけという感想です。が、学生からは「いつどんな風にキャリアプランをたて、それを実行してきたのですか？」と真顔で聞いてきます。そこで先に述べた感想を答えると、「そんなはずはないです」「どうしてその時に子供を産んだのですか？」「いくつぐらいまでに子供を産めばいいでしょう？」「仕事と子育ての両立はかなうのでしょうか？」「どうやったら留学できるのでしょうか？」「地域医療に貢献するにはどうしたら？」「プライマリーケアのできる医師になりたい」などと矢継ぎ早に医学生のトレンドワードを交えた質問がきます。もちろん丁寧に答えますが、だんだん私の心はざわつきだし「人生、計画通りになんかいかないよ」と

声を荒げたいところですが、そこはこれまた我々の学生・研修医時代にはなかった「〇〇ハラ」になってしまうので、やさしく「若いときはね、がむしゃらに、自分がやってみたいことを欲張りにやってみようね、道はあとからつながるから。ただしあとで後悔するから決断は自分でしょう！」とって授業を終えていました。そのうち私は年表に、自分が諦めたこと、できなかったことを噴き出しでいれるようにしました。今はあまりにも周囲に情報があふれており、まわりに色々な人生プランが風船のようにフワフワ浮いていうよう

に思えるのでしょうか。若いんだから、もっとなりふり構わずでいいのと思うのは私が年をとったからでしょうか？だから私は「キャリアプラン」という言葉が好きではありません。

彼女らが医師となって、現実には直面したとき、しなやかに、自分の力で未来を切り開いて前にすすんでいってくれることを祈るばかりです。

（この原稿の締め切り直前の土日が医師国家試験だったのでついつい教え子を思い出しました）